

1. 実施概要

- (1) 日時：平成24年11月27日（火） 13:30～15:20
(2) 場所：金沢歌劇座 大集会室
(3) テーマ：「人が住まい、集い、つながる、中心市街地の実現をめざして」
～まちの魅力と賑わい創出のために～

(4) 進行

- 13:30～13:35 開会
・開会の挨拶 金沢市長 山野 之義
- 13:35～14:05 基調講演
・金沢工業大学副学長 水野 一郎
- 14:10～15:15 パネルディスカッション
・コーディネーター：水野 一郎
・パネリスト：国土交通省都市局まちづくり推進課長 清瀬 和彦、
新潟市副市長 塚田 桂祐、金沢市長 山野 之義、
金沢市商店街連盟会長 小間井 隆幸
- 15:15～15:20 閉会の挨拶
・内閣府地域活性化推進室参事官 佐竹 克也
- 15:20 閉会

2. 開会市挨拶

- 2年半後に、北陸新幹線が金沢開業となる。このことは、間違いなく本市の大きな転機になると思う。中心市街地はその都市の顔であり、その顔が元気であるかどうかはその都市のひとつのバロメーターであると思う。
- 今日のシンポジウムでは、これまでの中心市街地活性化の取組や今後の方向性について、様々なお立場の方からお話しをいただく。私も皆様と一緒に金沢市のさらなる発展のために、もっと元気なまちづくりのために、しっかり勉強させていただきたい。そして、今日学ばせていただいたことを間違いなく行動に移すべく努力することをお誓い申し上げてご挨拶とさせていただきます。



3. 基調講演

《「みやごころ」と「モザイク」の中心市街地》

- みやごころというのは、なんとなくいちばんお洒落なものがあり、楽しそうで、人と出会ったり、なんか起こりそうな…というところのことで、都心と書く。これがないと都心（としん）ではないというつもりでこの言葉を使っている。またモザイクというのは多様な色が混ざっている、即ち多機能なものがあるということ。
- 全国の都市が中心市街地活性化法に取り組んできたが、なかなか前進が難しかった。課題の大きさを再認識した。郊外に住宅地を作ってきたとか、車には郊外が便利だとか、あるいはIT化で人が動く必要がなくなったとかがある。もうひとつ中心市街地そのものに更新する能力、努力が欠けていた。その中でコンパクトなまちづくりを目指して法改正された。
- いつも郊外が栄えたから都心がだめになるという言い方をするが、一方で都心自体にも課題があるんだということがいえる。金沢の場合は大学が郊外へ出ていったとか、県庁が郊外へ転出するとかいろいろな問題があるが、それは大学が成長するためにある意味必要だった、また、県庁が県全域のサービスを潤滑的に行うために必要だったとか、いろいろな条件が重なっているわけが出ざるを得ないこともあるが、都心に更新能力がもう少しあってもいいと思う。
- 片町中心街を元気にできないかというプロジェクトがつい先週始まったばかりだが、ここにもいろんな知恵を出して、更新する力を引きだしていかなければと思う。専門学校が3つ4つできているし、ホテルも戻ってきている。コンビニやファッションブランドも。少しずつ金融単機能のまちから民間の力によって多機能化が進んできている。マンションもできた。そういう多機能化の中にみやごころが入ってくることだ。今金沢の場合は、課題を抱えながらも少しずつ先が見え始めようとしているということをお伝えして最初のお話としたい。



4. パネルディスカッションの概要

- (コーディネーター) 本日は、まず中活法の取組みと成果についてご紹介いただき、課題や今後の方策についてもう一回お話をしていきたい。
- (清瀬課長) 2006年に改正まちづくり三法になったが、このときの柱として総理大臣認定制度ができた。内閣官房に中心市街地活性化本部を設け、各省庁が連携しながら支援する形をとった。これまで107の市で、118の計画の認定が行われている。国土交通省では、暮らしにぎわい再生事業、まち再生出資業務、まちなか居住の推進、さらに土地の成形・集約化の支援、身の丈再開発、都市再生整備推進事業（旧まちづくり交付金）などの支援を行っている。

- (新潟市副市長) まちなかの中心として機能していた大和デパート新潟店が撤退することになり、再生本部を立ち上げた。また車に頼らないまちづくりということで、スマートウェルネスシティを標榜し、自転車通行帯やまちなかの自転車駐輪場の整備、バス路線の強化を行っている。また花街文化が残っており、振袖さんと呼ばれる若い人も入ってきている。水と土の文化創造都市として、芸術祭も開催している。水辺空間とアーケードを結び付ける改修、新潟駅の立体交差なども進めている。成果目標は下回っているものもあるが、居住人口や第3次産業就業者数は伸びている。



- (小間井会長) まず商業の環境がどうなっているか。売り場面積は増え続けているが事業者数は減少を続けている。これは、まさに商店街から中小のお店が消えて、郊外の大型店が増え続けていることを示している。従業員数も平成11年をピークに減少してきており、大型店は雇用を創出するという疑問を感じている。商店街はにぎわいをつくることはいっしょ懸命やってきたが、中心商店街の老朽化した建物などの更新の時期となり、これを現在の経済状況の中で商業者が自力で更新していく事ができるのかという課題を抱えていることを本日ご紹介させていただいた。
- (金沢市長) 今年3月から認定第二期基本計画がスタートしている。中心市街地活性化においては「住まう」ことが大きなテーマであるということで、様々な手厚い支援をしてきた。その結果、平成21年にまちなかの人口の年間社会動態がプラスに転じた。「賑わいの創出」に向けては、近江町市場をその雰囲気を残しながら再開発をした。また、北陸新幹線開業にあわせた駅通り線の再開発事業や駅西広場の再整備も行っている。ソフト面では、四季折々に行われるイベントがまちなかに刺激を与えてくれている。まちなかの無線LAN環境の整備にも力を入れている。金沢市というブランドをしっかりと確立し、民間の方々とともに“発信”していくことが大切だと考えている。
- (清瀬課長) 中心市街地はまちの顔であり、まちづくり全体のランドデザインの中で中心市街地活性化を位置付けていただきたい。また、行政だけでなく民間の方々が一体となり主体的に取り組んでいただくことが大切だと思う。その意味で、金沢、新潟の両市は先進的であり期待している。
- (新潟市副市長) 郊外のショッピングセンターよりもかなり面白いということを知恵を絞ってやっていかないと、だめじゃないかと強く感じている。そういう意味で金沢市さんの取組みを参考にさせていただきたい。
- (小間井会長) 日本の都市文化は地域の商業や商店街が支えてきた部分があると思う。それが転換期にきている。国、地方行政がこの日本の文化を守るんだという政策をぜひお願いしたい。そうすれば商店街の皆さんも知恵を出し更新していく動機づけ、励みになると思う。

- （金沢市長）これまでの市の取組みの方向性は間違っていなかったと思う。香林坊は元気になるつつあるし、武蔵も旧ダイエー跡地で複合商業ビルの目途がたってきた。片町A地区の再開発はこのエリアの賑わい再生の象徴になると思う。今後も、官民力を合わせながらしっかり取り組んでいきたい。
- （コーディネーター）高度成長期の大きな投資の時代はおわって、官民一緒になってクオリティを上げていく時代が来たということだと思う。中心市街地という都心に、遊びもあれば、交流もできれば、好きなものが手に入るショッピングもできれば、グルメ、イベントがあるなどそういうものが集積しているところが人間を成長させ、文化を育て、豊かな生活を感じさせる。そういう意味で、みやごころがある中心市街地が生活全体を上げていく力になると思う。

6. 閉会の挨拶

- 中心市街地活性化は平成18年から現在の取組みが始まり、107の市で118の計画が進められている。全国には1700の市町村があるが、中心市街地活性化に取り組んでいたのは107で、熱心に先頭を走っているところだ。
- まちなかに住もう、にぎわいづくりをしようというのが共通のコンセプト。そして地域の資源を活かしてどう取り組むかという工夫をしていただいている。5年間を区切りとしているが息の長い取組みで、市民の方々のご理解がいちばん大事だ。全国21のシンポジウムを開催し、より効果的な施策が打てないかということで検証作業にも入っている。皆さまと一緒に次の施策を考えていきたい。

7. 閉会